

JPSアメリカ切手部会が選ぶ

『アメリカ切手』 ベスト50!!



1位

ファースト・イシュー5c
「フランクリン」(1847年)

いわゆる「一番切手」である。印面上方の左右隅にある「U.S.」で国名を示している。フランクリンは、イギリスの植民地時代から独立後まで初代郵政長官だったので、切手の図案にも度々登場する。360万枚の発行だが、意外に入手難。

毎年、好評をいただいている“ベスト50!!”特集。今回はJPSアメリカ切手部会の方々にご協力をいただき、“<アメリカ切手>ベスト50!!”をご紹介します。郵趣大国・アメリカが誇る重厚感溢れる切手の数々をお楽しみください。(編)

[構成・協力] JPSアメリカ切手部会

2位



トランス・ミシSSIPPI博覧会記念 \$1「嵐の中の牛」(1898年)

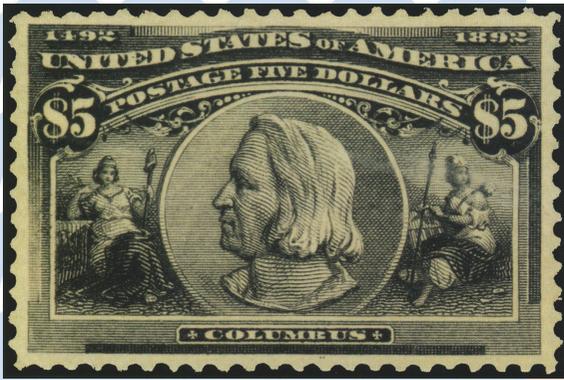
アメリカ中部のミネソタ州オマハで開催された博覧会の記念切手9種の中の1種。図案はアメリカ西部地方での家畜の移動という説明だが、原画はイギリス・スコットランドの風景で、アメリカ政府がイギリスに陳謝する結果となった。世界の収集家の間で、人気の高い切手として知られている。[200%]

3位



ファースト・イシュー10c「ワシントン」(1847年)

ファースト・イシュー2種の中の1種で、図案は初代大統領ワシントンの肖像。当時、郵便料金は前納でも後納(受取人払い)でも同じだったため、切手で前納する人は少なく、重量便や遠距離郵便料金のこの切手は約90万枚しか売れなかった。そのため現在では、かなり入手の難しい切手となっている。



4位

世界コロンブス博覧会記念\$5「コロンブス肖像」(1893年)

アメリカ最初の記念切手セットの中の最高額。額面の5ドルは当時の価値では、4人家族の1週間の食費にも相当すると言われていた。そのため、僅か3万枚足らずしか売れず、何年もの間「額面割れ」で取り引きされていた。現在では入手至難の対象。



5位

高速郵便使用大型高額切手\$9.35「月とワシ」(1983年)

「エクスプレス・メール」と呼ばれる、翌日までの配達を保証する郵便料金用として、切手帳の形で発行された最高額の普通切手。迫力あるワシも人気を得た。[130%]

6位



航空切手24c「カーチス・ジェニー」(1918年)

ワシントンとニューヨーク間に開設された、定期航空路による航空郵便料金用として発行。1番機の機体を忠実に描いており、世界最初の正刷航空切手としての貫禄も十分である。「宙返り」のエラーでも知られている。

7位



ツェッペリン航空切手\$2.60「グラフ・ツェッペリン号」(1930年)

ドイツの飛行船による、南北アメリカ飛行を記念し、この便に搭載する郵便物用に発行された3種中の最高額。超横長の印面に飛行船を描き、船名まで小さく入れたのは彫刻凹版だからこそと言える。世界のツェッペリン切手の中でも、最も優れたデザインと言える切手で、皮肉にもドイツ切手より人気がある。額面は当時としては破格の高額で、発行当時の収集家はこれ1枚を買うのに大きな決断を要したと言われる。

☆世界一の切手産国「アメリカ」☆

世界には多くの切手発行国があります。収集家は発行された切手の種数ばかり気にしていますが、発行枚数の総量ではアメリカはダントツの1位です。

多くの産業統計と同様に、世界の他の国とは比較にならない程、大量生産、大量消費の国アメリカのことです。1847年(日本では弘化4年のこと)の切手発行(1・3/数字は順位を示す、以下同)以来、急速に切手の世界でもこの勢いを示してきました。

例えば、ペリー提督が浦賀へ来た1853年の統計でも、すでに年間約5,600万枚の切手を発行しています。20世紀に入ると、年間100億枚を超える切手が発行(消費)されるようになりました。

こうした事情は、1枚の切手を鑑賞するときにも知っておく必要があります。どんな物でも、僅かしか作らない場合と大量に作る場合とでは、同じようにはいかないからです。

☆100年以上もの間、“彫刻凹版”にこだわる☆

アメリカ切手の大きな特徴は、最初の切手を発行以来、100年以上もの間(若干の例外はありますが)、印刷版式を“彫刻凹版”に限定していたことです。

この版式は、手工の芸術性が高く、印刷物(切手)は優雅で堅牢であり、昔から有価証券の印刷に最適であるとされてきました。その一方で、熟練者が必要であり、コストも高く製造に時間がかかるなど、大量生産には向かないという欠点もありました。切手



8位

パン・アメリカン博覧会記念2c
「急行列車」(1901年)

アメリカ最初の2色刷り記念切手セットの中の1枚。題材もトピカルとして好ましく、この当時の切手としては珍しくリアルに描かれている。なお、この切手は中央逆刷のエラーが発売され、実際に気付かないで郵便に使用されたカバーもある。



10位

世界コロンブス博覧会記念2c「コロンブスの上陸」(1893年)

16種セット中の低額切手。当時の国内書状基本料金用だったので、発売枚数も約15億枚という、記念切手としては桁外れに大きな数字となっている。この図案は何回も切手に採用されたが、その中でもこの切手が最も明瞭に描いていて、コロンブスの業績を示す切手として評判が良い。

初期の博覧会記念切手や航空切手の名品が ベスト10にランクイン!!

※2〜3等、特記外、200%拡大。

9位

ツェッペリン航空切手65c
「グラーフ・ツェッペリン号」(1930年)

7位の切手と同じセットで最低額のもの。最も短い区間の料金用として発行された。ツェッペリン飛行船が大西洋上を飛行するイメージの図案で、飛行船を迫力十分の構図で描いており、これもツェッペリン飛行船切手の中で上位にランクされる。



では元祖のイギリスも1870年代にはこの版式に見切りをつけ、高額以外は凸版に切り替えています。

しかし、アメリカでは「シークレット・サービス」という政府機関が、この基本方針を譲らず、印刷現場は苦心の結果、さまざまな問題を克服してきました。仕上がった切手を見ると、オーストリアやスウェーデンなどに見劣りがする点もありますが、これは量産規模が比較にならない程に大きいというのが、その理由となっています。

☆初期の切手印刷は民間印刷会社で☆

当初、アメリカ切手は民間の印刷会社に製造が委託されていました。この契約は会計年度*ごとに更新されたので、その委託先も何回か変化しています。

*アメリカの会計年度は、毎年7月1日に始まり、翌年6月30日に終わる。

1869年の新シリーズ出現も、こうした印刷会社の委託変更がキッカケで、新しく契約先となった印刷会社は従来の切手のイメージを一新しました。切手は正方形となり、図案も肖像だけではなく、当時の花形だった「SL」(14)や大西洋航路の「汽船」など、普通切手にもトピカル図案が登場。また高額切手では、凹版2色刷りという、当時の世界切手としては斬新な切手が出現しました(19・20)。

☆豪華版記念切手の発行☆

1893年には、コロンブスによるアメリカ大陸発見の400年を記念した万国博覧会が、シカゴで盛大に開催されました。

この時の郵政長官は、実業家としても有名なワナ



11位

航空切手10c 大西洋無着陸横断飛行記念
「スピリット・オブ・セントルイス号」(1927年)

リンドバーグによる、単独の大西洋無着陸横断飛行という世界的快挙を記念して発行された。極めて短期間で製作されたため、後に図案の地図に誤りがあることが判明した。切手帳も発行。



12位

国立公園切手5cイエローストーン(1934年)
世界最初の国立公園切手として、10種発行された中の1種。正確な時間において、地中から吹き上がる巨大な水柱は、見物客を圧倒する。この迫力を表現するため、文字や額面を小さくした構図が好評。



13位

1851年シリーズ1c
「ブルー・フランクリン」(1851年)

普通切手の第2次シリーズ。刷色の青と初期の彫刻凹版の美しさがマッチし、最低額切手にもかかわらず、人気は高い。専門収集家の間では、早くから製造面の研究が進み、プレーティングが完成してさらに人気が高まった。

11~20位には初期の普通切手や航空切手が登場!!



14位

1869年シリーズ3c
「蒸気機関車」(1869年)

アメリカ最初の正方形普通切手のシリーズ。しかもこのシリーズでは、肖像中心の図案から一変し、トピカル図案が採用された。SLが採用されたのは、当時アメリカ大陸横断の鉄道が完成したことに関連している。[180%]



15位

トランス・ミシシッピ博覧会記念\$2
「ミシシッピ川の大橋」(1898年)

9種セット中の最高額切手。ミシシッピ川の汽船と川に架かる道路・鉄道兼用の大橋。橋上の鉄道車両も注目されている。

メーカーでした。彼はすでに切手収集家のことを意識していて、一儲けを企み、額面1セントから5ドルまでの当時としては破格の16種セットの記念切手(世界コロンブス博覧会/4・10)を発行しました。

これはアメリカ最初の記念切手ですが、世界的にもかなり早い発行となっています。しかし、高額の設定は収集家泣かせで、売れ行きは期待外れの結果となりました。切手は長い間、額面割れで取り引きされましたが、100年以上経過した現在では、世界的に入手しにくい切手となっています。

☆財務省印刷局製切手の登場☆

この「世界コロンブス博覧会」記念切手の売れ行き不振などを発端とした契約問題が原因となって、

1894年以降、すべての切手製造は首都ワシントンにある財務省印刷局で行われるようになり、これは最近まで続いていました。

この頃からアメリカの産業はさらに大きな発展を遂げ、切手の需要もますます高まり、年間の切手製造量も大きく増加していきました。また20世紀に入ると、世界的に切手製造技術の革新が行われ、収集的に見てもアメリカの1908年シリーズ(24・31・32)が「透しの有無」、「目打の変化」、「平面印刷と輪転印刷」など、分類が複雑になった1つにはこのような事情が挙げられます。

こうした状況下、米国印刷局は大きな業績を上げていきます。コイル切手や切手帳などといった新し



16位

航空切手25c「金門橋と飛行機」(1947年)

戦後、アメリカから日本宛の航空郵便料金用だったため、当時、海外文通をしていた収集家にはなつかしい切手。図案に描かれた「ストラトクルーザー」は、B29爆撃機の改造機体であることも印象的。



18位

**野生動物保護シリーズ3c
「アメリカシロツル」(1957年)**
野生動物の保護をキャンペーンするため、1957年以降さまざまな図案の切手が発行された。これはその第1弾で、しかも初期のザンメル凹版による切手として、成功した事例と言える。



17位

航空切手80c「ダイヤモンド・ヘッド(ハワイ)」(1952年)

最近では、日本でもよく知られた光景が図案となっている。しかし、この高額航空切手は、生花をアメリカ本土に空輸する、航空小包の料金用であったことは、収集家でもあまり知られていない。そのため当時の使用済は少ない。

※4～5枚、特記外、150%拡大。



19位

**1869年シリーズ30c
「ワシと国旗」(1869年)**

クラシック切手の中で、アメリカ人には最も美しいとされている切手。この時代に凹版2色刷りで、こうした大胆な構成は珍しかった。ただ高額なので、当時あまり人目に触れなかった。[180%]



20位

**1869年シリーズ90c
「リンカーン」(1869年)**

アメリカ人に最も愛され尊敬されている大統領として、リンカーンの切手は多いが、これはその中でも最も優雅な例だろう。最高額面のため6万枚弱の発行数で、現在は珍品の1つである。[180%]

いスタイルのものを、能率よく大量に製造するようになったのも、その一例と言えます。

特にコイル切手では、湿式凹版のコイルを製造するために、新型の輪転印刷機(スティックニー機)の開発に成功しました。この印刷機は、カナダやスウェーデンなどにも輸出され、凹版印刷のコイル切手で世界的に有名となりました。

☆航空郵便と航空切手の登場☆

アメリカのライト兄弟が、人類初の動力飛行に成功したのは20世紀初めです。これがキッカケとなって、世界的に飛行機への関心が高まりました。特に初期の飛行機は性能が貧弱でしたが、郵便物は軽いので、これを運ぶことは早くから検討されました。

アメリカでも、1910年代には多くの試験航空便が実施されましたが、1918年には初めての定期航空路がワシントンとニューヨークの間に開設され、以後ほぼ毎日定期便が飛ぶようになりました。

これに合わせて、専用の航空切手も同年に発行されました(6)。当時の他の国とは違って、初飛行便の機体を忠実に描き、しかも凹版2色刷りの正刷切手を発行した点では、やはりアメリカの国力を世界に示したといってよいでしょう。

航空切手では、この後も1927年の「リンドバーグによる大西洋無着陸横断飛行記念」(11)、1930年の「ツェッペリン飛行船による南北アメリカ飛行記念」(7・9)など、大型の魅力的な切手が登場しています。

21位



小包切手20c「郵便を運ぶ飛行機」(1913年)

ライト兄弟が飛行に成功してから僅か10年ばかり後に、世界最初の本格的飛行機切手として出現。ライトの改良型機体に郵袋も描かれている。[120%]

22位



1851年シリーズ3c 「ワシントン」(1851年)

当時の国内書状基本料金用切手。ペリーが浦賀へ来た頃の切手にあたる。

23位



1922年シリーズ2c 「ワシントン」(1923年)

アメリカ切手中、最も大量に発行し、使用された切手。そのため多くの種類に分類され、人気も高い。

24位



1908年シリーズ5c 「赤の5セント」(1917年)

世界を驚かせた有名なエラー。2cの実用版中に、誤って5cの印面を転写したことによる。2c切手は32位を参照。

25位



日本開国100年5c 「ペリー提督と軍艦」(1953年)

日本にとっては、有名な歴史的の事件を記念した切手。彼の艦隊を眺める、江戸幕府の役人らしい人物など、アメリカ切手としては変わった図案。[120%]

26位



リバティイ・シリーズ\$5 「ハミルトン」(1956年)

乾式凹版で発行された最初の5ドル切手。刷色の黒が映え、最高額としての貴緑ある切手。

27位



1922年シリーズ\$5 「女神(アメリカ)」(1922年)

このシリーズの最高額で、シリーズ中、唯一の2色刷り切手となっている。

28位



速達切手10c 「走る郵便配達員」(1885年)

世界最初の速達切手で、当時はこのよう制服を着た専門配達員が郵便局に配置されていた。[120%]

☆収集家の大統領が活躍☆

1933年にアメリカの大統領となった、F.D.ルーズベルトは、熱心な切手収集家でした。彼は大統領に就任すると直ちに、切手発行政策に積極的介入しました。それまでの場当たり的な発行政策に対して、収集家に喜ばれるような特徴あるシリーズやセットを発行するよう指導したのです。法律を改正して、郵趣雑誌やカタログなどに切手図案全体を紹介できるようにしたのも、彼の業績の1つです。

彼の任期中に発行された切手の中には、今回の「ベスト50」に選ばれた切手がいくつもあります。例えば

◇国立公園切手(1934年・10種セット/12)

◇偉人切手(1940年・35種セット/45)

◇国旗シリーズ(1943-44年・13種セット/42)

といったシリーズ形式の記念切手では、全体のバランスを考えた構成が高い評価を得ています。

特に普通切手では、1938年の大統領シリーズ(44・48)が特徴的で、32種類というロングセットと全体を通したデザイン上の工夫は、アルバムに整理してみるとよくわかります。中でも22セントまでは、額面数字が各大統領の就任順位とマッチしていて、収集家にとっては覚えやすい切手ともなっています。

また航空切手においても、1935年の「太平洋横断航空路記念」(43)や、1938年の「国内航空用ワシ図案の2色刷り切手」(40)、さらに1941年の「双発輸送機シリーズ」(47)、1934-36年の「航空速達切手」(29)など、いずれも現在まで収集家を魅了してきた切手を残しています。



29位

**航空速達切手 16c
「合衆国の紋章」(1936年)**

ルーズベルト時代の傑作の1つ。図案はアメリカ合衆国の正式紋章。この2年前には青色の1色刷りのものが発行されている。[120%]



30位

小包切手 5c「郵便列車」(1913年)
この時代のSL切手として、世界的にも優れた図案である。郵便列車という表示も印面にあり、郵袋の引渡し装置が描かれているのも興味深い。[120%]



31位

**1908年シリーズ \$2
「フランクリン」(1918年)**

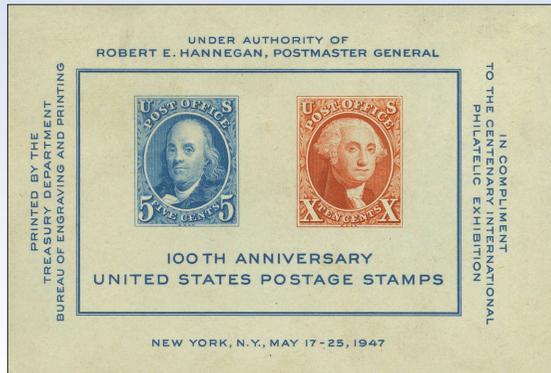
第1次世界大戦中に、多くの郵便小包を送送する必要が生じ、高額切手の需要が増加した。これに対応して発行された2色刷り切手。



32位

**1908年シリーズ 2c
「ワシントン」(1908年)**

最も大量に発行し、使用された切手の1つ。用紙・透し・目打・版式など変化に富み、多くの種類に分類できる。



33位

**切手100年
〈ニューヨーク国際切手展〉
小型シート(1947年)**

アメリカ最初の切手2種を組み合わせた小型シート。刷色は変更しているが、印面はかなり精巧に模写していて、最初の切手を持たない人々に歓迎された。100年前と同じ額面で使用できるのは、アメリカならではのだろう。[75%]

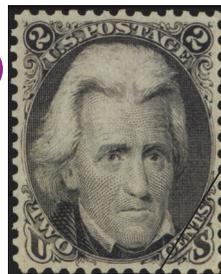
※6~7割、特記外、130%拡大。



34位

**リバティール・シリーズ 8c
「自由の女神」(1954年)**

アメリカを象徴する女神像を描いた切手は多いが、これはその中で最も着きがよく、歓迎された切手。低額であるにも関わらず、凹版2色刷りで大量印刷を実現したところがアメリカらしい。



35位

**1861年シリーズ 2c
「ジャクソン」(1863年)**

第7代ジャクソン大統領の顔を、大きく描いた特徴的な切手。アメリカでは「ブラック・ジャック」の愛称で呼ばれている。収集家として見ると、センターの良いものが少ないので、苦労させられる典型的な例。

☆第2次世界大戦後の印刷技術革新☆

第2次世界大戦時に、アメリカは国土が戦火を蒙らなかつたため、終戦後、多くの国が新切手の発行をためらっている間も、ほとんど戦前と同様に次々と凹版印刷の新切手を発行し続けました。ただ、ルーズベルト大統領が終戦直前になくなり、しばらく切手発行は斬新さがなくなってしまいます。

しかし、1950年代以降は再び印刷技術面での革新が始まりました。従来長く続いてきた「湿式凹版」から、水分を極端に減らした「乾式凹版」へと移行が始まります。また凹版での多色刷りに関しても、「1版多色刷り(ザンメル方式)」という技術が取り入れられるようになりました。これにより、在来方式では2色しか使用できなかったものが、とたんに3色以上

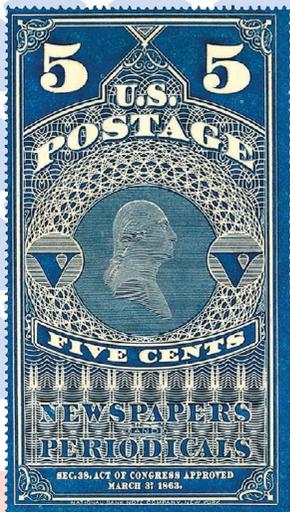
も可能になり、世界的な多色化の傾向にアメリカも加わることができるようになりました。

さらに凹版に限定していた規制も緩和され、遅ればせながら1967年からはグラビアが、1970年代からは平版との掛け合わせが採用されるなど、変化に富む新しい姿の切手が登場するようになります。

☆郵政公社となり、新たな発行方針に☆

1971年、アメリカの郵政はついに郵政公社へと移管され、切手も新たなこの新組織によって発行されるようになりました。

これ以後は、従来とは全く発行方針も変わってきていて、最近ではめまぐるしく新趣向の切手が登場しています。インターネットの発達した現在でも、アメリカは依然として郵便を大規模に利用しており、



36位

新聞切手5c「ワシントン」(1865年)
郵便の必要性で作られた切手としては世界最大。これは大量の新聞の包みに貼る目的だった。このため、使用済はほとんどがキズ物。「70%」



37位

「ニューヨーク国際切手展」小型シート(1926年)
アメリカでの第2回の国際切手展を記念して発行された、アメリカ最初の小型シート。同時期に発行された記念切手の組み合わせ。「50%」



38位

航空切手5c「ビーコン(無線標識)」(1928年)

アメリカ大陸横断の航空路を夜間も飛行できるように、ロッキー山脈に設置された標識を描く。「120%」



39位

速達切手10c「マーキュリーのヘルメット」(1908年)

速達切手の中の例外図案。アメリカでは「メリー・ウイドー」という愛称で呼ばれ、人気が高い。「120%」



40位

航空切手6c「ワシ」(1938年)

アメリカの象徴となっているワシを2色刷りにした、ルーズベルト時代の傑作の1つ。当時の国内航空料金用で、大量に使われた。「120%」



41位

国防切手1c「自由の女神」(1940年)

第2次世界大戦が始まり、国際的緊張が高まる中で発行された。アメリカ切手の中では、消印映りの良い切手。

それに対応する切手も次々と現れています。

☆収集家から見たアメリカ切手☆

最後に収集家から見たアメリカ切手の特徴を、いくつかの挙げておきます。

(1)大量な発行と使用

郵便にほとんど必要のない切手を、次々と発行する国も世界には多くありますが、アメリカは必要がある切手を発行し、しかも大量に郵便に使用してきました。その結果、大多数の切手は日本にいても容易に入手できます。

(2)切手についての知識が得やすい

アメリカは情報大国でもあります。こと切手に関しても、政府から公開される情報は極めて詳細かつ正確です。印刷局時代に製造された切手なら、そ

のすべての製版記録が公開され、すべての実用版の試刷シートが国立博物館(スミソニアン)に所蔵されており、手続きを取れば誰でもこれを調査できます。

また収集家側の研究も徹底していて、英語で発表されているのも便利です。優れた文献の多くは、日本でも「切手の博物館」に所蔵され、利用できます。

(3)現物を見る機会が多い

外国切手収集では、肝心の切手そのものに接する機会が、日本にいと少ないのも問題です。しかし、アメリカ切手は昔から日本でも収集する人が多かったため、国内の展覧会でも、しばしば優れたコレクションに接する機会があります。

以上のような特徴も、アメリカ切手を収集する上での利点だと思います。(文・魚木五夫)



42位

国旗シリーズ5c「ポーランド」(1943年)
世界大戦で枢軸国に蹂躪された国々の切手を描く13種セット。国旗を忠実に再現するため、あえて平版との掛け合わせを使用し、成功している。[120%]



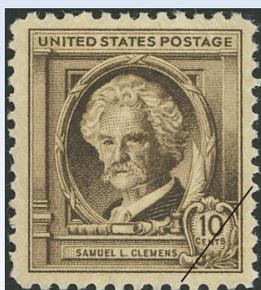
43位

航空切手25c太平洋横断航空路記念「チャイナ・クリッパー」(1935年)
飛行艇による、サンフランシスコからマニラまでの太平洋横断定期航空路が実現し、これを記念した切手。飛行艇を正面から捉えた迫真の構図。[120%]



44位

大統領シリーズ\$5「クーリッジ」(1938年)
ルーズベルト時代の象徴とも言える、普通切手の新シリーズ32種中で、最高額の切手。



45位

**偉人切手/作家10c
マーク・トウェイン(1940年)**
7分野で5人ずつ、合計35人の肖像を描いたロングセット。



46位

パナマ太平洋博覧会記念5c「金門海峡」(1913年)
サンフランシスコ湾に、まだ金門橋が架橋されていなかった頃の光景。[120%]



47位

航空切手6c「双発輸送機」(1941年)
太平洋戦争の前後を挟む時期に、最も活躍した航空切手。題材は実在しない機種であることが唯一の問題点。[120%]

48位



大統領シリーズ3c「ジェファソン」(1938年)
アメリカ切手中、最も大量に発行し、使用された切手の1つ。47位の航空切手と同時期に使用された。

49位



パロマー山天文台記念3c「天文台のドーム」(1948年)
当時、世界最大の天体望遠鏡を設置し、世界の天文関係者を羨ましがらせた。色と構図が良い。[120%]

50位



クリスマス切手4c「クリスマスの飾り」(1962年)
アメリカ最初のクリスマス切手で、当時まだ少なかった、ザンメル印刷による切手の成功例。

※8〜9位、特記外、130%拡大

「JPSアメリカ切手部会」のご案内

JPSアメリカ切手部会は、1979年の発足で、現在国内外に約100名の会員が在籍しています。

部会発足前の1976年のアメリカ独立200年記念切手展(BIPEX'76)開催を機に、毎年アメリカ切手展を開催しており、2012年で38回目を迎えました。また毎月第3土曜日と最終水曜日(第一例会から2週後の月のみ)に「切手の博

物館」で例会を開催しています。

部会報「THE U.S. PHILATELY」は、年6回の発行(B5判・20頁/奇数月の隔月刊)で、年会費は2,500円、ユースは1,500円です。

部会に興味をお持ちの方は、下記世話人へお問い合わせください。

【お問い合わせ先】世話人：太田啓啓
〒251-8691 藤沢郵便局私書箱13号
Eメール：tak_ohta@cityfujisawa.ne.jp
FAX：0466-22-0579



部会報「THE U.S. PHILATELY」(年6回)